

# 世界でいちばんやかましい音

ベンジャミン・エルキン 文  
松岡 享子 訳  
朝倉 めぐみ 絵

① もう、ずいぶん昔のことです。

② そのころ、世界でいちばんやかましい所は、ガヤガヤという都でした。そこでは、人々は、話すということをしませんでした。口を開けば、わめくか、どなるかしたからです。

③ 人々は、自分たちの町のアヒルが、世界中のどこのアヒルよりもやかましい声でクワッククワックと鳴くこと、自分たちの町の家が、世界中のどこの家の戸より大きな音を立ててボタンボタンとしまること、自分たちの町のおまわりさんが、世界中のどこのおまわりさんよりもけたたましい音を

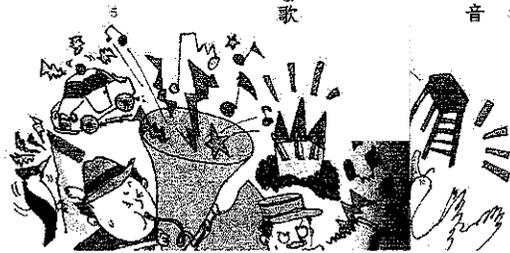
てピーツと笛をふくことを、たいそう自まんしていました。

④ そして、この町の人々は、四、五人集まるとすぐ、こんな歌を歌いました。

とびらを バタンと けっ飛ばせ  
ゆかを ドシンと ふみ鳴らせ  
昼間は わめき  
夜、高いびき  
ガヤガヤ ガヤガヤ

⑤ この町の入り口には、こんな立て札が立っていました。

これよりガヤガヤの都  
世界でいちばんやかましい町



⑥ ところで、ガヤガヤの町のやかましい人々の中でも、とりわけやかましいのは王子様でした。王子様は、名前をギヤオギヤオとよみました。そして、まだ六つにもなっていないのに、たいいていの大人よりずっとやかましい音を立てることができました。王子様は、大声でわめき散らしながら、おなべとやかんをぶつけ合わせ、おまけにヒューツと口笛を鳴らすことができました。

⑦ 王子様の大好きな遊びは、ドラムかんとブリキのバケツを高く積み上げて山にし、それから、大きな音を立てて、ガラガラガツシャンガツシャンガツシャンと、その山をくずすことでした。王子様は、はしごを使って、山をどんどん、どんどん高くしていき、音をどんどん、どんどんやかましくしていきました。けれども、どんなに音をやかましくしても、これで十分という気持ちになれませんでした。「もっとやかましい音が聞きたい。もっともつとやかましい音が聞きたい。世界でいちばんやかましい音が聞きたい」と、王子様は思いました。

⑧ さて、あと一月半もすると王子様の誕生日が来るとある日、王様は、王子様を

よんで、誕生日のおくり物には何がいいかと聞きました。

「ぼく、世界でいちばんやかましい音が聞きたい。」

と、王子様は言いました。

「よろしい。」

と、王様は言いました。

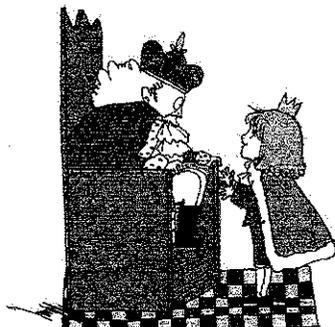
「それでは、わが近衛軍楽隊に命じて、その日は、朝からばんまで、とびきりやかましい音でたい

こをたたかせよう。」

「でも、その音なら、ぼく、前に聞いたことがあるよ。あれじゃ、世界でいちばんやかましい音にはならないよ。」

と、王子様は、不満そうに言いました。

「よろしい。では、そのうえに、その日は、わが町の警官を全員動員して、朝からばんまでとびきりけたたましい音で、笛を鳴らさせよう。」



「それも前に聞いたことがあるよ。それだけじゃ足りないよ。」  
と、王子様は言いました。

「では、これはどうじゃ？ その日は、学校を全部休みにする。そして、子どもたちは一日うちにおいて、朝からばんまで、とびきり大きな音で、そこいら中の戸という戸をけりまくるようにさせるのじゃ。どうだ、これでいいだろう？」

「うん、少しはいいと思うけど。」  
と、王子様は言いました。

「でも、それだって、世界でいちばんやかましい音というわけにはいかなと思うんだ。」

⑨ 王様は、たいへんやさしいかたでした。でも、だんだんいらいらし始めました。

「いったい、どうすりや気がすむんだ？ おまえに何かいい考えでもあるのか？」

「うん、ぼく、ずうつと前から考えてたんだ。世界中の人が、一人残らず、同時にどなったら、どんな音になるだろうって。何百万、何千万、何億もの人が、みんないっしょに『ワアー』ってさげんだら、きつと、それが、世界でいちばんやかましい音だと思うんだ。」

⑩ 「ふうむ」と、王様は考えこみました。考えれば考えるほど、これはおもしろいという気がしてきました。

⑪ 「こいつは、いける」と、王様は思いました。「それに、もし、これを実現させたら、わたしは、全世界の人間に同時に同じことをさせた世界最初の王として、歴史に名前が残るわけじゃ。」

「よし、やってみよう！」  
と、王様は言いました。

⑫ さあ、それから、ガヤガヤの町は、いそがしくなりました。暑い暑いジャングルから、寒い寒い氷の国まで。毎日、毎日、何千人という知らせが、あらゆる場所へ送られました。電報で、トムトムで、伝書バトで。車で、飛行機で、夫ぞりて。



⑬ そして、間もなく、その返事がどき始めました。だれもかれも、

「この思いつきはおもしろい。喜んで協力しましょう。」  
と言ってきました。全世界の人が同じ時刻にいっせいにさげぶという考えに、全世界の人が賛成したようでした。

⑭ 日がたち、王子様の誕生日が近づくとつれて、興奮は、どんどん高まっていききました。どこの国でも、ギヤオギヤオ王子の誕生日のことで、話は持ちきりでした。世界中どこへ行っても、どんな小さな村へ行っても、このことでポスターの出ていない国はありませんでした。そして、ポスターには、その国の言葉で、正確に、何月何日、何時何分にさげぶかということが書いてありました。その時刻が来たら、みんな、ありったけの声で、

「ギヤオギヤオ王子、お誕生日おめでとう！」  
と、さげぶことになっていました。

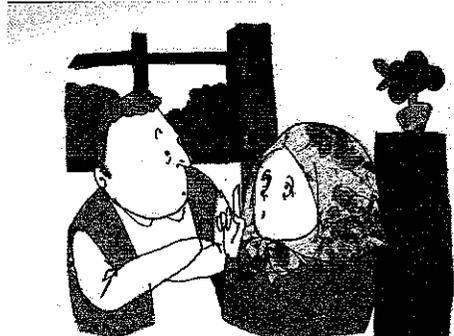
⑮ ある日のことでした。ガヤガヤからずつとずつとはなれた、ある小さな町で、一人のおくさんがだんなさんに話をしていました。

「ねえ、あなた。わたしはね、わめくのはいいと思うのよ。でも、ちよつと気になるのはね、自分がありつたけの声をさげぶてしまったら、ほかの人の声が聞こえないってことなの。だって、そうでしょう。自分の声しか聞こえませんが。だけど、わたし、世界でいちばんやかましい音というのを、ちよつと聞いてみたい気がするの。」

「おまえの言うとおりだ。」  
と、だんなさんは言いました。そして、しばらく考えから、こう言いました。

「どうだろう、そのとき、ほかの人といっしょに口だけは開けて、声は出さないでいたら？ そうすれば、ほかの連中の出す声が、いったいどんなものか聞けるわけだ。」

⑯ おくさんは、これはすばらしい考えだと思いました。そして、別に悪気はなかったのですが、近所のおくさんたちにこの話をしました。



①7 別に悪気はなかったのですが、近所のおくさんたちは、だんなさんにこの話をしました。

①8 別に悪気はなかったのですが、だんなさんたちは、職場で、回りようにこの話をしました。

①9 別に悪気はなかったのですが、その人たちは、友達にこの話をしました。友達はその友達に話しました。

②0 やがて、世界中の人たち、おひざ元のガヤガヤの町の人たちさえ、そのときが来たら、口だけは開けて、声は出さなくて、ほかの人のさけぶ声を聞こうと、ひそひそ言いかわすようになりました。

②1 だれも、王子様の誕生日を台なしにするつもりはありませんでした。でも、みんな、こう考えたのです。

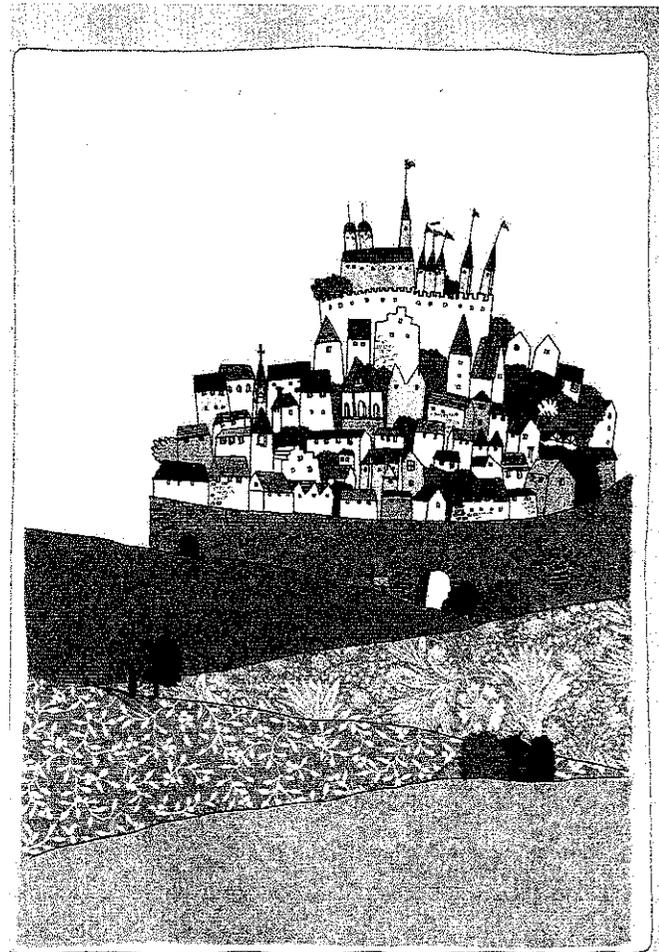
「わたし一人くらいだまってたつて、分からないわ。だって、何百万、何千万、何億って人がさけぶんですもの。ほかの人がさげんでいる間、わたしは静かにして、どんな音になるか耳をすましていますよ。」

②2 さて、いよいよギョオギョオ王子の誕生日がやってきました。世界中いたるところで、人々は、広場や、集会場に集まっていました。人々の目は、じいっと時計に注がれていました。カチツカチツと時計の秒針が動き、約束のしゅん間が近づきます。息づまるような興奮が、電気のように世界中を駆けめぐりました。

②3 もちろん、ガヤガヤの町では、興奮は、その極に達していました。人々は、宮殿の前の広場に集まっていました。王子様は、宮殿のバルコニーから身を乗り出して、世界をいちばんやかましい音が始まるのを、今か今かと待っていました。

十五秒前……十秒前……五秒前……  
三、二、一、それっ！

②4 何百万、何千万、何億という人が、世界をいちばんやかましい音を聞くために耳をすましました。そして、その何億という人の耳に聞こえたのは、全くのちんもくてした。だれもかれもが、ほかの人の声を聞こうとして、声を出さなかったからです。だ



れもかれもが、仕事は人にまかせて、自分はその結果だけを楽しもうとしたからです。

②5 さて、かんじんのガヤガヤの町では、どうだったでしょう？

②6 この町の歴史が始まって以来、初めて、ガヤガヤの町は、しんと静まり返りました。世界をいちばんやかましい音で、王子様の誕生日をお祝いするはずだったのに……

②7 人々は、王子様に悪いことをしたと思いましたが、申しわけなさとはずかしさで、人々は、頭をたれ、こそこそと家に帰りかけました。

②8 ところが、急に、足を止めました。あれは、何でしょう？ 宮殿のバルコニーから聞こえてくる、あの音は？

②9 まさかと思いましたが、まちがいありません。王子様です。王子様がうれしそうに手をたたいているのです！ 王子様は、しきりにはしゃいで、とんだりはねたりしながら、庭の方を指差していました。

③0 生まれて初めて、王子様は、小鳥の歌を聞いたのです。木の葉が風にそよぐ音を、小川を流れる水の音を聞いたのです。生まれて初めて、王子様は、人間の立てるやか

ましい音ではなく、自然の音を聞いたのです。生まれて初めて、王子様は、静けさと落ち着きを知ったのです。そして、王子様は、それがすっかり気に入りました。

②① さて、それからというもの、ガヤガヤの町は、もうやかましくなくなりました。人々は、静かに話すようになりました。ガヤガヤの町のアヒルは、世界中のどこのアヒルよりも、やわらかな声でクワクワと鳴きました。ガヤガヤの町の家々の戸は、世界中のどこの家の戸より、音を立てずにとまりました。ガヤガヤの町のおまわりさんたちは、世界中のどこのおまわりさんよりも、やさしくそつと笛をふきました。そして、人々は、自分たちの町が、世界でいちばん静かで平和だということを目にするようになりました。

②② 今では、ガヤガヤの町の入り口には、こんな札が立っています――。

ようこそ、ガヤガヤの都へ

世界でいちばん静かな町